

展 示 評

〜外からみる奈良博〜

正倉院展雑感

混んだところが嫌いである。息苦しい満員電車、予約のとれないレストラン、そして人の背中しか見えない展覧会。正倉院展もいつも混み合っている。かつてはチケットを買うために並ばなければならなかった。その長蛇の列を見て、行き先を奈良県美に変えたこともある。独立行政法人になってから、チケットは前売りができるようになり、JRの窓口でも買えるので、その点は解消された。また、奈良博の新館が拡張されたこともあり、以前よりは混雑が緩和された感じがする。でも、混んでいる。

混んだところで、一つひとつ、作品を鑑賞するのは苦手だ。ほくはとりあえず会場をざっと見て、見たいものがどこにあるのかを把握する。そして、振り出しに戻って、飛ばし飛ばしに興味のある作品だけを見る。あとはチラッと覗く程度である。なぜか、展覧会をはじめから順番に見ようとする人は多い。もちろん、厳密に構成された展覧会もあるので、順番に見ていかないと理解できない場合もあるが、正倉院展は一から順に見なくてもよいだろう。図書館について端から順に本を読む人はいないのだから。疲れる前にまず興味のあるものを見るのが多くの鑑賞法である。

人に押されながら美術鑑賞なんかできない。ゆつくりと正倉院展を見られないものか。そこで一つ提案。国立博物館も法人として独立し、自由になったのだから、さまざまな鑑賞の場を提供してもよいと思う。入場料金の差別化をおこなうのである。ほくのように混雑の中で展覧会を見たくない人も少なくないと思う。そういう人に対しては特別な時間帯を設ければよい。週一回、いや展覧会期間中に一回でもよい、入場者数を制限してプレミアム料金で解放するのである。逆に、通常よりも安くして新たな来館者を確保することもできる。その選択は来館者に任されるのだから、レビューに特別な人だけが招待されるよりはよほど自由平等である。

それは将来に期待するとして、第五十六回正倉院展はいつものにぎわいの中で拝見した。今回の見所は、まず楽器であろう。なかでも、遙かベルシアの音色が響いてきそうな「楓蘇芳染螺鈿槽琵琶」

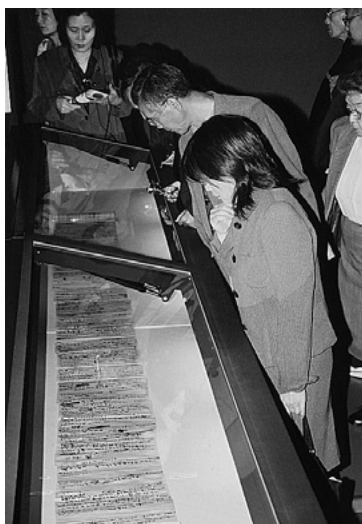
は圧巻であった。槽の異国情緒たつぷりの螺鈿細工、唐画を髣髴させる捍撥の密陀絵、これが日本でつくられた可能性があるというのだから、当時の日本がいかに外来の文物に憧れていたかがうかがえる。私が専門とする染織の分野では聖武天皇がもたれたかかったという「紫地鳳形錦御軾（ひじつき）」が有名である。錦の鳳凰がキリッとしていいのである。しかし、それ以上に目をひいたのは「白綾帳（綾織りのとばり）」という地味な染織品であった。綾は表からみると、文様がヨコ糸で織りだされる。裏からみれば、逆にタテ糸で文様が織りだされることになる。つまり、表と裏では文様の見え方が違う。この帳

は綾が表・裏・表・裏・表となるように五枚に接いである。天平の昔、風に吹かれた帳は、光の具合によつて文様が微妙に浮きでたり、沈んだりしたのであろう。今ではその帳も平のぞきのケースに収まり、微動だしない。保存のためやむを得ないが、ライティングによつては綾のおもしろさを引き出すことができたかもしれない。文書のところで鑑真和尚の手紙を横目にしつつ（後で図録を見て、今年が鑑真来朝一二五〇年にあたることを知り、この計らいに感じ入った）、次の部屋へ。「紫檀塔残欠（小塔の部材）」の部屋に入つて部材の細かさに感心したが、部材が一部屋を占領していて飽きてしまった。最後の部屋で、いくつかの染織品を見て今日は満足。

やはり疲れたが、また来年も来てしまふのだらうな、正倉院展には！



観覧風景



観覧風景

関西学院大学教授 河上 繁樹